

令和6年10月25日

浜田市議会議長 笹田 卓 様

議員名 岡 本 正 友

調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため研修等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 研修名

地方議会を変革する 生成 AI 活用 沖縄研修会
～先進技術活用と県内議会改革に学ぶ～

2. 受講の目的（市政との関連など）

生成 AI の活用に関する知識を深め、具体的な応用事例を学ぶ

3. 期 間 令和6年10月16日（水） ～令和6年10月18日（金）

4. 調査経費

59,462 円

（経費内訳 受講料 5,573 円 、旅費 53,889 円 ）

5. 研修のポイント・議員活動や市政への反映など

- ・キーボードで打たなくても、マイクで話しかけると会話が成立し、難しく長い話
も瞬時にまとめて回答してくれる。
- ・しかしそれが全て正解ではないので、見極めが大事。
- ・学んだ生成 AI 技術をどのように現場に応用していくか。
（行政業務の効率化、観光産業のプロモーション、自動翻訳システムの活用など）

6. 研修内容

（詳細は別紙のとおり）



【研修の概要】

- ・研修日程/場所：10月17日(木)13時より17時30分 沖縄県青年会館
- ・主催/講師：主催者、早稲田大学マニフェスト研究所 招聘研究員

1～2 限目担当講師・ローカルマネージャー 青木 佑一、西川 裕也
3 限目担当講師・林 紀行（上記研究所の招聘研究員/日本大学法学部教授）
参加者 33 名、ワークショップ 3～4 名（A～I）、布施 F グループ

ChatGPT とは何か？（検索機能ではない）

- ・手前の文に、確率的にありそうな続きの文字をどんどんつなげていく AI
- ・蓄積したデータが増え、人間より偉そうな文章を生成できる用になった
- ・確率上一番ありえる回答＝無難な内容⇒適切な指示
- ・内容は、絶対に正しいとは限らない⇒ファクトチェック

地方議会で活用するポイント

- ・議会質問の項目づくり
- ・質問の原稿づくり：不明瞭な点等の洗い出し
- ・議会の答弁書の作成⇒答弁書を想定した質問づくり
- ・過去の議事録から、質問と回答を予測する⇒「模擬議会の質問・答弁」
- ・首長や執行部の回答⇒不足している点を明らかにする

地方議会が ChatGPT を利用する利点

- ・迅速な情報収集と分析
- ・多様な視点と提案の生成
- ・市民とのコミュニケーションの強化
- ・議事録の自動化
- ・政策立案の支援
- ・教育と学習の促進

研修会のプログラム(運営方針)

- (1) 生成 AI である ChatGPT をどんどん使う
- (2) 間違えることはあまり気にしない
- (3) 出来ないところは助け合いながら進める
- (4) 生成 AI は使用回数に制限がある
- (5) 個人情報や機密情報は入力しない

生成 AI の基礎知識

- ・セッションの内容： 各セッションのタイトル、時間、主要テーマ。
 - 例：生成 AI の基礎、生成 AI を活用したプロジェクトの事例紹介。
- ・質疑応答： 研修中に行われたディスカッションや質問の要点
- ・生成 AI とは： 機械学習、デュープラーニングの技術をベースにした AI の解説
- ・生成 AI の応用範囲： 画像生成、文書生成、音声合成、デザインなどの実例
- ・メリット・デメリット： AI 活用による利点と課題となるポイント

沖縄での研修の意義

- ・地域特性を生かした AI 活用の可能性： 沖縄の文化、経済、観光産業との関連性を考えた生成 AI の利用例
- ・地域課題の解決： 人材不足、遠隔教育、観光資源の活用など、AI の役割

研修で得られた知見

- ・新しい技術の学び：研修を通して得た技術的なインサイト
- ・今後の応用方法：学んだ生成 AI 技術をどのように現場に応用していくか。
 - 例 行政業務の効率化、観光産業のプロモーション、自動翻訳システムの活用



まとめと今後の展望

- ・研修の総括：全体の感想や評価
- ・今後の展望：AI 技術をどのように持続的に活用していくか。(次のステップ)
 - 例 行政業務の効率化、観光産業のプロモーション、自動翻訳システムの活用

所感

キーボードで打たなくても、マイクで話しかけると会話が成立し、難しく長い話も瞬時にまとめて回答してくれるが、まだそれが全て正解かどうかはわからないので、自分自身でも調べ、見極めで行くことが大事と感じた。

今後は、学んだ生成 AI 技術をどのように現場や議会で応用していくかである。日々進歩していく AI の技術をうまく活用していけるように、自己研鑽が必要である。

また、あらゆる場面ですでに活用されてはいるが、一般質問にもその技術を取り入れて、より深い質疑となるよう取り組んでいきたい。

